今回公開した「自然災害伝承碑」代表事例

国土地理院

資料 3

震嘯災記念碑
（青森県八戸市）

昭和8年（1933）3月3日午前2時30分、大地震が発生した。その後、海のかなたから大きな音が響くと瞬く間に大津波が襲来し、一瞬で多くの命、財産を奪った。この昭和三陸地震の災害を忘れることなく警戒と予防に努めること。「地震海鳴りほら津波」

三陸大海嘯溺死者慰霊塔
（岩手県山田町）

昭和8年（1933）3月3日午前3時10分、昭和三陸地震による津波が襲来した。旧大沢村の被害は、流失戸数72戸、溺死者1名。

女川いのちの石碑　女川浜
（宮城県女川町）

「夢だけは　壊せなかった　大震災」
東日本大震災(2011)では女川町を高さ14.8m（浸水高18.5m、遡上高34.7m）の大津波が襲った。この女川いのちの石碑は、震災直後に女川第一中学校（現在の女川中学校）に入学した生徒らが、将来の津波被害を最小限にする取組の一つとして、地域住民と一体となり女川町内全ての浜に設置した石碑のひとつ。東日本大震災による津波到達地点より高い場所に設置されており、「大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください」などの教訓が刻まれている。

日本海中部地震大津波遭難者慰霊之碑
（秋田県三種町）

昭和58年(1983)5月26日、日本海中部地震(マグニチュード7.7)により秋田・青森沖に津波が襲来した。この天災により、八竜地域では住宅134戸が全壊。慰霊碑には、津波で亡くなった旧八竜町民5名(釜谷浜で波にのまれた4名と能代港の石炭火力発電所用地造成現場で作業中不明となった1名)の名が刻まれている。

石橋供養塔・水災記念之碑
（埼玉県加須市）

明治43年(1910)は、梅雨の頃から7月にかけて雨が多かった。8月になると豪雨が続き、利根川・荒川は氾濫して堤防が決壊した。濁流が阿良川堤に押し寄せて水利組合が警報を発したが、堤は遂に破られ、この辺り一面は泥海となった。安永2年（1773）建立の供養塔に明治44年（1911）に水災記念が加えられている。

紀念碑
（富山県富山市）

安政5年2月26日（1858年4月9日）の飛越大地震により、大鳶・小鳶山が崩壊し湯川を塞き止め湖水ができた。同年4月26日（旧暦）、湖水の水が、閉塞口を貫いて湯川から常願寺川へと流れ大洪水となり、下流域で64名が犠牲になった。

東海豪雨水害之碑
（愛知県名古屋市）

平成12年9月11日から12日にかけて、東海地方に記録的な大雨が降り、名古屋市内では庄内川、新川、天白川などの広い流域で浸水被害が発生した。新川では左岸堤防が決壊し、西区と旧西枇杷島町は最大2.8mの深さで浸水、全半壊88棟、床上浸水5,293棟（水場川越水を含む）などの甚大な被害が発生した。

慰霊碑（交通安全地蔵）
（宮崎県三股町）

梅雨前線の活発化に伴う記録的豪雨のため、1969年6月30日に三股町勝岡で幅約30m、高さ約10mのシラス層の法面で崩壊が発生し、通行中の女子中学生4 名が犠牲となった。